研究部会活動紹介

IS リサーチメソッド研究部会

飯沼守彦（いいぬま　もりひこ）
日本大学
柴　直樹（しば　なおき）
日本大学
田名部元成（たなぶ　もとなり）
横浜国立大学
松下倫子（まつした　みちこ）
関東学院大学

I.　IS リサーチメソッド研究部会の近況

本研究部会は，わが国の IS 研究の方法論的多様化と質の向上を目標として，IS リサーチメソッドの世界的動向を調査するとともに，わが国における IS 問題への適用可能性について探求し，その成果を社会に還元することを目的として活動している．本節では，2023 年および 2024 年の活動を簡単に紹介する．

2023 年は，夏合宿および定例会を 1 回開催した．夏合宿では，井頭昌彦編著（2023）「質的研究アプローチの再検討」を輪読し，KKV 論争（King, Keohane, Verba による質的研究への助言に対する質的研究者による批判）に関する日本の質的研究者からの議論をもとに，質的研究の諸問題について議論した．

2024 年は，春合宿と夏合宿，および定例会を 4 回開催した．春合宿では，各メンバーが現在行っている研究に関する報告と議論が行われた．夏合宿では，アルヴェッソン・サンドバーク（佐藤訳）（2023）「面白くて刺激的な論文のためのリサーチ・クエスチョンの作り方と育て方」を輪読し，創造的・革新的な研究のためのリサーチ・クエスチョンの作り方に関する方法論について理解を深めた．定例会では，6 月に，ゲストスピーカーとして University of Southern Maine の武田寛寿氏をお招きし，“AI in the Classroom: Rethinking Programming Instruction in the age of ChatGPT” と題してご講演いただき，プログラミング教育における生成 AI 活用の可能性等について議論を行った．

本稿における以後の議論は，2023 年夏合宿と 2024 年夏合宿で輪読した書籍に関連する話題を研究会メンバーに寄稿してもらいまとめたものである．

参考文献

M. アルヴェッソン・J. サンドバーグ・佐藤郁哉訳『面白くて刺激的な論文のためのリサーチ・クエスチョンの作り方と育て方―論文刊行ゲームを超えて』白桃書房，2023 年．

井頭昌彦編著『質的研究アプローチの再検討―人文・社会科学から EBPs まで』勁草書房，2023 年．

（部会主査：飯沼守彦）

II.　量的／質的アプローチ間の方法論的論争と相互補完性について～歴史研究と教育研究の事例から～

ここ 2 年間の研究部会活動の中で輪読した井頭編著による『質的研究アプローチの再検討』（以下『再検討』とする）から，森村敏己著による第 3 章「個別事例研究は何を目指すのか～歴史研究における質的アプローチ」と，山田哲也著による第 4 章「教育研究における質的研究方法論の位置」を紹介したい．前者は歴史研究において質的アプローチとしての個別研究の役割を，後者は教育研究における質的な研究アプローチが果たす役割を論じたものである．

II.1　歴史研究における質的アプローチ

森村によれば，歴史研究において1960年代から70年代にかけて全盛だった量的アプローチ（「数量的歴史学」，「系の歴史学」などと呼ばれる）に対する反動として，80年代以降，質的アプローチが重視されるようになったとある．

質的アプローチの代表例として取り上げられている2つの事例が興味深い．1つめは，著名な歴史学者カルロ・ギンズブルグによる著作，『チーズとうじ虫』[1]である．これは16世紀北イタリアに生き，書物から作り上げた独自の世界観が原因で異端審問の対象となり，教皇庁の命令により火炙りの刑に処せられた粉挽屋メノッキオの事例研究を取り上げたものである．「彼（ギンズブルグ）の研究はある意味で，書物の影響力を数値化によって測ることを批判し，人によって異なる書物の読まれ方，言い換えれば主体的に書物を読むという行為を分析する必要性を主張したシャルチエの要求にあらかじめ応えているとも考えられる．」（『再検討』，p. 99, シャルチエについては文献［2］を参照）という．

もう1つは，ナタリ・Z・デイヴィスによる16世紀南フランスの事例を描いた『帰ってきたマルタン・ゲール』[3]である[1)]．裕福な農民マルタン・ゲールが妻子を残して失踪し，8年後に妻ベルトランドのもとに帰ってくる．二人は夫婦生活を再開し新たに子供をもうけるが，その後，本物のマルタンが帰ってくる．「デイヴィスは，ベルトランドは騙されていたのではなく，自分の意志でしたたかに生き抜いたのだと主張する．」（同，p. 100）「当時の地方慣習法と女性への抑圧の中で，（中略）デイヴィスの解釈によれば，夫の残した財産と自分たち親子の生活を守ろうとした姿が興味深い」（同，p. 102）という．

いずれの事例においても，研究者による解釈のバイアスは避けられず，解釈の妥当性の判断は困難であるがゆえの論争が存在する．しかし，量的／質的アプローチを「対立するものとして捉えたり，その優劣を論じたりすることには意味がなく，両者を相互補完的に理解することが望ましいという点で，多くの研究者は見解が一致している」（同，p. 106）という．

II.2　教育研究における質的アプローチ

山田は，教育社会学の創始者とされるエミール・デュルケームと，2020年に新訳が刊行された『社会システム』[4]の著者として知られるニクラス・ルーマンの二人の言説を援用して，教育という営みを次のように整理している．まず，「デュルケームは教育を成人世代が若い世代に対し行う『体系的社会化』と捉えていた」（同，p. 118）とした上で，ルーマンの主張を次のように捉える．「システム理論の視座からすると，（中略）教育を通じた社会化とは，各人の心的システムに固有な結果としてなされる『自己社会化』なのである．」（同，p. 120）つまり，教育とは，教育者からの「他律的」な関与をうけた被教育者（生徒や学生）が，自己を「自律的」に社会化することを促す営みだ，というのである．

上記のとおり教育を捉えると，教育者が意図を持って教育する際に，同じ内容を同じ方法で提示しても，それに対する反応は被教育者各人で異なることになる．つまり，教育者が意図したとおりに被教育者が内容を受け取るかどうかは不確実であり，その結果，教育においては因果統御が困難となる．また，教育研究の方法論的視点からは，一般化された知見の導出が困難ということになってしまう．山田はこれらを踏まえて，教育学研究における質的アプローチによる研究の信憑性・説得性評価の基準は，定量的なそれとは別であるべきだと述べる．さらに，「大綱的な基準，当該領域で活動する研究者コミュニティでゆるやかに共有されている考え方はあるように思われる」（同，p. 139）とし，それら（大綱的基準と考え方）について述べている．

II.3　経営学研究への示唆

上記の2つの分野での問題提起に関しては，経営学がその対象とする経営という営為についても同じことがいえると考えられる．個別の経営実践の解釈に避けられないバイアス，一般化可能な知見の乏しさや因果統御の困難性に対して，経営学研究がどのように対処すべきか示唆を与えてくれるのではないか．

注

1）　この物語は，当初は歴史書ではなく映画のシナリオとして書かれた（同，p. 104）とあり，この物

語は実際に映画化されている．加えて，ハリウッドがこの物語を南北戦争後の米国に翻案してリメイク，「ジャック・サマーズビー」（原題：Sommersby）（1993）という映画になっている．

参考文献

［1］ Ginzburg, C., *Il formaggio e i verni*, Einaudi, 1976.（杉山光信訳『チーズとうじ虫』みすず書房，1984年）

［2］ Chartier, R., *Lectures et lecteurs dans la France d'Ancien Régime*, Seuil, 1990.（長谷川輝夫・宮下志朗訳『読書と読者―アンシャン・レジーム期フランスにおける』みすず書房，1994年）

［3］ Davis, N. Z., *The Return of Martin Guerre*, Harvard University Press, 1983.（成瀬駒男訳『帰って来たマルタン・ゲール』平凡社，1983年）

［4］ Luhmann, N., *Soziale Systeme*, Frankfurt Suhrkamp, 1984.（馬場靖雄訳『社会システム〈上・下〉』勁草書房，2020年）

（柴　直樹）

III.　統計的因果推論と質的知見の関係

本節では，林（2023）における，統計的因果推論と質的知見の関係に関する量的研究の立場からの議論に関して，特に，社会的利用を念頭においたエビデンスの「良さ」について，質的知見が担う役割についての議論を紹介する．そこでは，EBPs（Evidence-Based Practices）の枠組みを念頭に，量的なエビデンスを生産する代表的な方法である統計的因果推論を踏まえつつ，量的なエビデンスと質的な知見の関係性の整理が試みられている．

林（2023）は，“エビデンス”を「ある施策を推進もしくは制御する根拠となる科学的知見」，またEBPsを「“エビデンス”を実践に活かす取り組み」として広い意味で用いるとした上で，Kano and Hayashi（2021）に基づいて，社会的利用を念頭においたエビデンスの「良さ」について，5つの観点の軸を紹介している．それらは，（1）方法論的厳格性，（2）総体的一貫性，（3）文脈的接近性，（4）社会的適切性，（5）手続き的正当性である．

方法論的厳格性とは，科学的方法論の質の観点の軸であり，林（2023）は，この質は，知識生産に関する一連の方法論の基盤にある量的・質的な知見の妥当性により担保されていると指摘する．総体的一貫性とは，複数の知見の整合性の観点からの軸である．林（2023）は，総体的一貫性の視点における評価においては，多様なエビデンスの相互関係を多面的に吟味し，それらの間の論理的な一貫性や矛盾を見抜く能力が必要となるが，多くの場合，専門家の深い量的・質的知識が必要となると指摘する．

文脈的接近性は，解析により推定された因果効果ともともとの興味となる施策や政策の文脈における因果効果が，文脈的にどのくらい近いか，あるいは遠いかという観点からの軸であり，この軸は，エビデンスと質的知見との関係を検討する上で特に重要であるとし，移設可能性に関する節を別に設けて詳しく議論している．林（2023）は，データ解析に用いる手持ちデータに含まれる個体からなる「サンプル集団」，サンプル集団がサンプルされた際の母体となる「サンプル元集団」，研究そのものの興味対象である「ターゲット集団」という用語の導入のもと，「サンプル集団において推定された因果効果」を「サンプル集団における真の因果効果」として解釈する際の妥当性，「サンプル集団における推定された因果効果」を「サンプル元集団全体における真の因果効果」として解釈する際の妥当性，さらに「集団Aをサンプル元としたサンプル集団A'において推定された因果効果」を本来の興味の対象である「集団Bにおける真の因果効果」として解釈する際の妥当性を，それぞれ当該稿における内的妥当性，一般化可能性，移設可能性・外的妥当性として定義し，質的知見が，すべての妥当性において果たす重要な役割があるとしている．

社会的適切性は，ELSIやメタ的な合目的性の観点からの軸である．林（2023）は，一般的に「エビデンスの評価」は，その背景にある社会的文脈と簡単に切断できない部分があるため，エビデンスについて言及や評価をする際には，その背景にある社会的文脈を視野に入れた質的検討も重要となるとしている．最後の，正当性は，政治と科学におけるデュープロセス（手続き的な公正性）の観点からの軸である．エビデンスを評価し活用する際には「誰がどのような手続きに基づいて意思決定するか」に関する手続き的な公正性の重要性の認識が重要となるが，この手続き的公正性の評価においても，質的検討が重要であるとしている．

以上のとおり，EBPsにおける量的なエビデンスの妥当性は，さまざまな形で質的知見の妥当性に依拠している．すなわち，林（2023）は，質的知見は，上記の5つの観点のいずれにおいても「良いエビデンス」の基底を支えていると結論づけている．しかしながら，一方で，この結果が現状の質的研究アプローチ自体の妥当性を担保しているわけではないとも指摘している．質的研究アプローチの妥当性に関しては，上述の5つの視点から，今後，本研究会で議論を深めていきたい．

参考文献

林岳彦「第10章　Evidence-Based Practicesにとって「良いエビデンス」とは何か—統計的因果推論と質的知見の関係を掘り下げる」，井頭昌彦編著『質的研究アプローチの再検討』勁草書房，2023年，303–330ページ．

Kano, H., and Hayashi, T. I., “A Framework for Implementing Evidence in Policymaking: Perspectives and Phases of Evidence Evaluation in The Science-policy Interaction,” *Environmental Science & Policy*, Vol. 116, 2021, pp. 86–95.

（田名部元成）

IV.　研究方法をめぐる確執—「質的研究アプローチの再検討」と「面白くて刺激的な論文のためのリサーチ・クエスチョンの作り方と育て方」から—

今期この研究部会で輪読した2冊は大変刺激的な内容で，日々の研究活動のみならず，これまでの研究経験を振り返る上で示唆に富んでいた．

井頭（2023）はKing, Keohane and Verba（1994）をきっかけに巻き起こった大論争を端緒として，人文・社会科学分野における質的研究アプローチを考察している．質的研究方法と量的研究方法は本来ならば対立するものではなく，研究の過程で使い分けることで，よりよい研究成果が得られるはずだ．ICISなど国際会議では，単純な量的研究よりも，質的研究手法を組み合わせた研究発表が主流である．井頭（2023）は，質的研究方法を主として採用する研究者は，量的手法採用者から信憑性や意義を疑問視されることがあるが，それを体現したのがKKV（King, Keohane and Verbaの頭文字からの略称）であると指摘している．また，KKVは回帰分析など統計的手法の観点から質的研究方法の改善提案をしており，質的研究への理解が不足しているため，質的研究者から多くの悲観的応答を招いたとも解説している．

King, Keohane and Verba（1994）のはしがきには，「この本を執筆した目的は，定性的研究者に対して，科学的な推論について真剣に考え，科学的な推論を自らの研究にとりいれるよう促すことである」（真渕監訳，2004, p. vii）と書かれている．

はたして定性的（質的）研究は非科学的であり，それ故に正さなければならないものなのか．

かつて，この研究会の前身の研究会で輪読したGuba and Lincoln（1989）が思い出される．北川（2008）が整理しているように，「科学的」評価は管理主義であり，多元的価値に対応できていないこと，科学的パラダイムに依存し過ぎたことによって定量化できるデータのみが収集され，科学的手法を使用した結果には「真実」として受け入れる強制力が働くこと，科学は価値観と無関係であるとされることにより道義上の責任が軽減されているということが，そこでは批判されていた．

井頭（2023）の著者たちは，思想史・教育学・社会学・アクションリサーチ・政策学・文化人類学の各分野における質的研究の特徴を整理するとともに，量的手法がどのように質的知見に依存しているかを明らかにしようとしている．これは，King, Keohane and Verba（1994）から売られた喧嘩を買ったともいえるのではないか．

他方，アルヴェッソン・サンドバーグ（佐藤訳）（2023）は，面白くて影響力のある研究が少ないのは，既存研究の前提を自明として，隙間を埋めるような研究が多数を占めているからだと繰り返し述べている．そして，各専門分野内で前提や主流とされてきた知識自体を積極的に問い直し，批判的な観点から精査することによって，より斬新なリサーチ・クエスチョンや理論を生み出すことを推奨している．これも，論文の本数のみで評価されがちなアカデミック界の現状に一石を投じている．

Alvesson and Sandberg（2024）では，初版の刊行2013年から10年を経て，さらに調査を拡大し，出版される論文本数はますます増加しているが，議論

を巻き起こすような，重要でインパクトのある論文はますます減っていると断じている．

長い研究生活の中で身についた研究スタイルを見直すことは容易ではないが，自身の研究方法に真摯に向き合うことの必要性を痛感した2冊であった．

参考文献

M. アルヴェッソン・J. サンドバーグ・佐藤郁哉訳『面白くて刺激的な論文のためのリサーチ・クエスチョンの作り方と育て方―論文刊行ゲームを超えて』白桃書房，2023年．

Alvesson, M., and Sandberg, J., *Constructing Research Questions: Doing Interesting Research*, Second Edition, Sage, 2024.

Guba, E., and Lincoln, Y. S., *Fourth Generation Evaluation*, SAGE, 1989.

井頭昌彦編著『質的研究アプローチの再検討―人文・社会科学からEBPsまで』勁草書房，2023年．

King, G., Keohane, R. O., and Verba, S., *Designing Social Inquiry: Scientific Inference in Qualitative Research*, Princeton University Press, 1994.（真渕勝監訳『社会科学のリサーチ・デザイン―定性的研究における科学的推論』勁草書房，2004年）．

北川剛司「教育効果における妥当性・信頼性に関する一考察」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部，第57号，2008年，99–104ページ．

（松下倫子）

V. 量的方法と質的方法の融和的関係性に関する考え方

本研究部会は，長年，多様な情報システム（IS）リサーチメソッドの諸問題とその適用可能性について検討してきた．特に，「組織体」に根ざしたIS研究を念頭に，組織の多面的な側面を捉えることを重視し，質的方法を中心に検討を進めてきた．しかしながら，このことは量的方法を軽視するものではない．重要なことは，量的方法と質的方法の特性を把握し，目的に応じて有効に活用することではないだろうか．この視点に立つと，ISリサーチメソッドは，研究目的に応じて，量的方法と質的方法を使い分ける，または両者を組み合わせることが本質的となる．本節では，量的方法と質的方法を対立関係として捉えない考え方について紹介したい．

一つ目は相補主義である．相補主義はさまざまな方法論の強み弱みを明らかにしてそれらを状況に応じて使い分けようとする考え方である（木嶋，2002）．相補主義に基づき，量的方法と質的方法を使い分ける枠組みの代表がシステム方法論のシステム（system of systems methodologies）である（Jackson, 2003）．この枠組みは，分析対象となる問題状況を，その「複雑さ」と状況に関与する人々の「価値観」の2軸によって，六つに分類したものである．複雑さに関しては「単純」と「複雑」の二つ，価値観については「単一」，「多元」，「強圧的」の三つに分けられ，問題状況はこれらの組み合わせで特徴づけられる．各方法論は六つのいずれかにマッピングされるが，量的方法と質的方法との関係でいえば，価値観の軸で捉えることができ，状況を構成する価値観が一致していると想定する「単一」には量的方法が，多様な価値観や権力構造等を想定する「多元」と「強圧的」には質的方法がほぼ対応づけられる．相補主義に立てば，パラダイム対立を超え，問題状況はさまざまな捉え方が可能で，各方法は捉えられた問題状況に応じて有効であるという考え方が生まれる．これに対して，6つの問題状況分類の中の少数のみが強調され，他が無意味という考え方に支配されると方法的対立が生じることになろう．

二つ目は批判的実在論（バスカー（式部訳），2009）である．批判的実在論の主な関心は，諸現象の発生メカニズムまたは因果メカニズムを探求することである．批判的実在論では，実在は「経験のドメイン」，「アクチュアルドメイン」，「実在のドメイン」の3層によって構成され，探求すべきメカニズムは「実在のドメイン」に存在し，直接，経験・観察することができないとされる（ダナーマークほか（佐藤監訳），2015）．直接，我々が経験・観察できるのは「経験のドメイン」であり，ここで得られたデータをもとに「実在のドメイン」のメカニズムを推論することが求められ，そのための推論方法としてアブダクション・リトロダクション（ダナーマークほか（佐藤監訳），2015）を活用する．経験の世界で得られるデータは，質的なものと量的なものが考えられる．Zachariadis et al.（2013）は，批判的実在論ベースでメカニズムを推定する際に量的方法と質的方法を組み合わせて使用する混合研究法が有効であることを述べており，両者の相互作用の

必要性を主張している．

三つ目は，文化人類学の観点から論じられた量と質との関係性である．久保（2023）は，将棋における棋士（質的）と将棋ソフト（量的）の相互関係を，互いに共約不可能であるにもかかわらず，互いに結びつき発展していく過程として記述している．文化人類学では，研究対象の現地の人々の解釈枠組みと研究者の解釈枠組みは異なることを前提に，「人類学的な言明の有効性は，①『彼らにとって○○である』は妥当か，②『私たちにとって××である』は妥当か，③『彼らにとって○○であることを私たちにとって××であるものとして理解する』ことはいかなる妥当性や効果をもつのか，という三重の観点から検討される．」（久保，2023, p. 243）．このような視点は，量と質が共約不可能という前提に立った場合，重要となろう．それは，異なる基準に依拠する質的・量的アプローチがすれ違いながら関係しあうプロセスであり，互いに異なる基準においてそれぞれが妥当性を生み出し，関わりあっていること（久保，2023）を検討しようとする姿勢を表しているからである．この議論は，研究方法ではなく，より広く質的・量的なアプローチについて検討したものであるため，今後，方法的な意味を検討していく必要があろう．

以上，量的方法と質的方法を対立関係として捉えない議論を紹介した．今後は人を含むシステムの理解を深めるために，量的方法と質的方法の有効な関係性，およびその哲学的背景について検討していきたい．

参考文献

R. バスカー・式部信訳『科学と実在論―超越的実在論と経験主義批判』法政大学出版局，2009 年.

B. ダナーマーク・M. エクストローム・L. ヤコブセン・J. C. カールソン・佐藤春吉監訳『社会を説明する―批判的実在論による社会科学論』ナカニシヤ出版，2015 年.

Jackson, M. C., *Systems Thinking: Creative Holism for Managers*, Wiley, 2003.

木嶋恭一「ソフトシステムアプローチ」『社会・経済システム』第 23 巻，2002 年，51–65 ページ.

久保明教「質と量はいかに関わりあうか―現代将棋における棋士とソフトの相互作用をめぐって」，井頭昌彦編著『質的アプローチの再検討』勁草書房，2023 年，241–269 ページ.

Zachariadis, M., Scott, S., and Barrett, M., “Methodological Implications of Critical Realism for Mixed-Methods Research,” *MIS Quarterly*, Vol. 37, No. 3, 2013, pp. 855–879.

（飯沼守彦）